

健康・栄養研究所年報の発刊を祝す

名古屋学芸大学 学長 井形 昭弘

名古屋学芸大学は2002年（平成14年）に管理栄養学部、メディア造形学部の2学部で発足し、2005年にヒューマンケア学部を増設して現在まで発展してきました。2006年、第一回の卒業生を社会に送り出し、また2研究科を有する大学院も発足しました。いう迄もなく大学は優秀な人材を世に送り出すとともに、学問を研鑽し、その成果を社会に還元する責務をも有しています。

その観点から本学では栄養学の研究、学問活動の拠点として2004年に健康・栄養研究所を創設しました。大きな期待を背負ってスタートした本研究所は、その後多くの研究業績をあげ、大学のステータスを高め、かつ社会に大きな貢献してきました。ここにその成果を集約して健康・栄養研究所年報第一号を発刊することになったことは名古屋学芸大学にとっても、また私にとっても望外の大きな喜びであります。

栄養学は脚気の制圧を目指して明治時代に大きな発展を遂げ、第二次世界大戦後は主として栄養失調に取り組みその制圧に大きな成果をあげてきました。やがて飽食の時代になり、生活習慣病対策へと大きく転換しました。こどもの食習慣が社会的問題になり学校教育の場に栄養教諭の制度も取り入れられました。

一方、2002年には高齢社会創造への大きな一歩として介護保険が導入されましたが、2005年の見直しで高齢者の栄養状態が必ずしも良くないとの最近のデータにより、低栄養防止が介護予防の一つの柱として取り入れられました。かつて栄養士の守備範囲は提供する食事までとされていましたが、提供された食事を、どの程度食べられるか、またどの程度吸収されるかも栄養士の責務として問われるようになったのです。つまり栄養学は時代と共にその対象が代わり、常に時代に即応した臨機応変な対応が求められていると申せましょう。その意味で栄養学は正に激動する学問です。本研究所は正にその時代の目標に向かって前進してゆきます。まだまだ成長期にあるといえますが、今後研鑽を重ねて全国に誇る研究所に発展させたいと願っています。

以上、ここにわれわれの決意を述べて本年報の発刊の辞といたします。